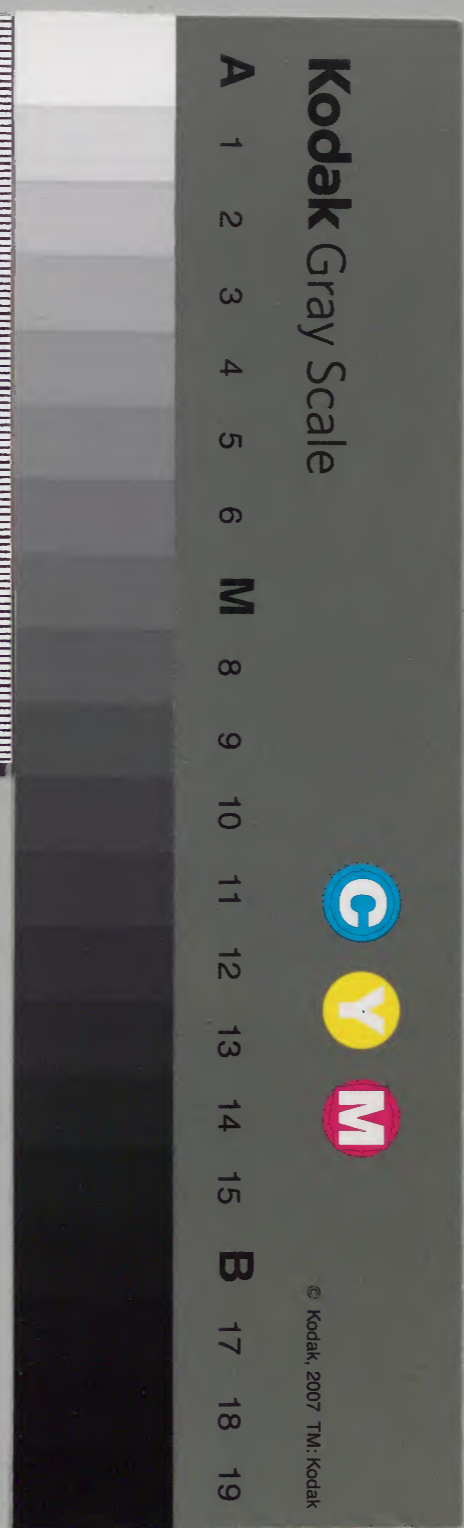


# 武德成業

四十四

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63 (44)
函號	150 12

内閣文庫			
五 の 函	五 三 五	一 冊 號	和 書 類



大徳元庚辰之正月七日

信濃守北條正時

先づ書上

先づ公情州へ本管に書上

先づ長久寺に書上

先づ府に書上

先づ寺に書上

先づ寺に書上

先づ寺に書上

先づ寺に書上

先づ寺に書上





市對顔亦遊ま方大津子市止宿はぬくき津へ由後  
此往由とままりの方左根子てままり東極高次菟城の  
良大津の町家の後々自燒は較少子付由一者て此往家  
居今々下宿有るままり子付由多上世今此較世作由由  
津に候々亦及中此供申の居所と是津正所のままり  
刻舟在々子付子津へ市停り此遊由とままり

古人物語

台徳院様小山ヨリ

權現様へ御使大久保助左衛門被

遣候然ハ其後大津ニテ

權現様ノ御返事如何ト御尋

候へハ助左衛門申上ル其時ノ御返事ハ萬事御捨御急候へ

ト御意ノ由申候

台徳院様御聞御涙ヲ御流ニ御聞違

ヒ被成真田ニ御手間被入ヲソク御越候トテ御涙ヲ御流ニ

御無念カリ助左衛門ヲ御ヲニコノ一代御面目也

台

徳院様御聞違故ナリ助左衛門子與市郎後召出サレ御使番

ニ成二番目半助兩人大坂ニテ關ニアリ助左衛門罪無之故

兩人被召出候

台徳院様御迎ニ本多中務石部ニテ御

越候ニ今度御手ニ不被逢御無念ノ由被仰候ニ中務御心弱

ク被思召一ニク候大坂ニテ頓テ成人可致ト申上ラレ候并

伊兵部ハ薩摩殿舅ナリ薩摩殿方ヲ引

台徳院様後迄



中世と云くは尋に遊のり上田表のありく左門  
海多と中上の新妻細の位上は均を何七列舞の角と  
は遊沖流左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
其くは月 秀忠公沖高多のく左の位右の位は  
位は月左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
中兼子代おれはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
まては口がきりれはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
そとに位は月左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
あ及の如 秀忠公左の位難有沖意は成下は成下

可存とは取合は位上はとく

右の版世上流市此四統少の是見高石中はゆ左の位難有沖意は成下は成下  
とありはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
左番のくはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
不直は百膳所はゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
そとに位は月左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
と兼信中はゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
まては口がきりれはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
其くは月 秀忠公沖高多のく左の位右の位は  
位は月左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
中兼子代おれはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
まては口がきりれはゆよはゆよはゆ左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
そとに位は月左のつとける台は均大弓遠くは中兼沖流  
あ及の如 秀忠公左の位難有沖意は成下は成下

續閑談

物とて大徳とて此意故合はるなりと此意の事書記中  
 小笠原乃度流丸毛六郎為貞貞和元年始く之別新成子  
 信成子少子為實一子小笠原為頼在之為為光  
 在在帝為成在在帝の為任在在帝の為光在在帝信成子  
 百九十年一初成子出り信成長男為摩頭長照の信成子  
 仕く其子之帝之傍親を為在甲子とて一と成と為信成  
 二男五帝為利捨為湯一何とて  
 権現様子仕く  
 在在帝之傍之子内近利久牛之助重成天正十六年  
 在在別備松子とて在在帝牛之助と則  
 台徳公の跡を在

り是は小姓とて大和物成北百俵と賜ふ于時十日天正十  
 八年相別津と村二石の地と相懸せしむる慶長五庚子石田  
 丸子依て  
 台徳公中仙居とて在在帝の時は小姓七人の  
 内五牛之助重成供養の所次高田表とて其後能族  
 伏見子於て沙羅堂の帝は小姓六人少々白紙とて在在  
 各及裁せしむる丸毛一人稱しとて其白紙の帝は一人と  
 其後重く帝代と賜はるる一とて其は中在沖橋頭子  
 應世に既しとて伏見の沙羅堂にありて在在帝は在在  
 為在帝大造守孫九郎直政等五人同居して成の別備後

橋辺所涉湯の活火を時の風信塵くとりて大焚きと名と  
 して涉湯は活すとの時に同様の事に入湯早る即ち出  
 丸毛筆成一人未湯の中より新の表脱し脱し  
 開偏より思ふれぬ地獄く足まは同様の事大焚火活  
 者と切合や中より牛の脚刀成括く忽ちのりよ  
 日人と斬伐の重ぬる刀大物切より足る者目と路は何者  
 勇成励一敷くく切立る處おひち屋成於か捕ら守年を  
 船多切敷きと一府と蓋くく涉堂皆迎去る大道者  
 孫九年より小傳家の長上別相校十万石の成重渡河守

政警ら嬌子より氏あるは随ひて中山より新元後  
 権現様くはふ今日活成より終り成命と是と初  
 多負と牛の所府よりけく立退くおの陪長より  
 討状句偏とりて天迫居の身とくく涉湯は疑く罪と  
 以て丸毛以下改易よ及び年ぬ物ととも奉成候く  
 台徳公牛の助と分る御寛永九年九月涉湯奉行と成  
 同十一年五十六歳より一率す  
は喧嘩人より傳ふ今も重成活成三年  
政徳の候とゆく去るをいふあり  
天元實記  
 大伴水運殿の内加賀中細を利長古方勅書お保り系  
 若登成去く涉一裁涉活利の候と分る賀山玉前候



妻細より中上は均々大聖守此城と攻居り山台父子と  
討果され此感懐の旨は信連利長等よりハ是事能登也  
大聖守此城攻の節と云々二の由味方よりハ敢軍忠  
お願ひ又その以後悪徒の者より誘はし願ひ引籠り  
在りし月あり而して存一勅書代右頼も度よりハ能  
別く是誠種々其自之加ハ此方取引ありは津歌對の  
多と云は成あり是此中より中上は均ハ此方も同愛  
私成も度と云は誠種々より其見は此均大回公等より月利  
長より津歌の中伏等あり成と云々此の外あり

弟奥より此存りと云は中上は均ハ人ハ此の事より  
此降とあり是悲愴よりハ津歌より此存り成也凶徒一  
味といふこと此均大家来たの成と云は利長より一  
伏は是中中存り此存りと云は中上は均ハ鬼角の終と  
云は中上は均ハ此より利長中上は均ハ山松宰相宛初ハ  
凶徒より一味より此存り秀家三成の終孫たる代と相成ハ  
子存先非と悔ち存存の由物と云ハ改系と云は誠前  
妻ハ後向成より終々ハ先と云は忠成とお願ひ中上の  
願ひ中利長の上及對面ハ此實ハ系中一戦津利と

とてしめしめたるは右忠節の中上而もせしむる物志方  
一向頼誠の弟一戦は孫利の弟宗隆の弟とてしめし  
少少ハ清忠の弟ありとては是を度方とてしめしむる  
元中一の後子少少大宰相の弟とてしめしむる  
少少の弟細ハ宰相親長秀の弟とてしめしむる  
何とてしめしむるより秀吉の弟とてしめしむる  
長重及孫の弟我の弟長秀と入魂の節目とてしめし  
後ハ少少の弟秀吉とてしめしむる少少の弟とてしめし  
弟を致多の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
送流

与一利とて元一対一弓矢不及とてしめしむる  
少少の死罪とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
利長後ハ少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
少少の弟少少の弟長重少少の弟とてしめしむる  
利長少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
少少の弟少少の弟少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
長重少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
少少の弟少少の弟少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
少少の弟少少の弟少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる  
少少の弟少少の弟少少の弟とてしめしむる少少の弟とてしめしむる





此振子不兼糸と云くは此の戦後の場後と初上陸後  
村上人校と云く一擧大とは此切平事誌のく道中  
筋此者其咄々くありは言中此の月掃心少く其  
此中上書校と相伝右と者たは清仲くは彼れと  
右の証四紀本の表ある大垣事此の月掃心右  
京兆と云此れ見くは此の自身の出勢とていふ  
とく我れ若くは此れ以兼主勅九郎とて中浪人蔵州  
廣海子と云く是は小振勅を清俊の月掃心とていふ  
日向事後少月掃心表くは此れ仕く者も我れ若くは  
此の物伝

節之新屋の傍事大校は命新候仕の申す物伝  
仕の証と相伝は

武徳大成

三成ハ關原ノ戰場ヲ逃シ去テ江北ノ草野ニ隠レ居リ寺ニ  
身ヲ匿シ大坂ニ奔ントス身ニ襤褸ヲ着破笠ヲ被リ鎌ヲ腰  
ニ挟テ樵夫ノ一子ス眼病ヲ煩ヒ藪ノ中ニ卧ス二十三日田  
中兵部力士卒是ヲ見テ恠問三成カ曰樵夫也兵部力士卒澤  
莊右衛門素ヨリ三成カ面ヲ知ル即是ヲ生捕ル三成懐中ニ  
短刀ヲ抱テ兵部ニ請テ云我耻ヲ忍身ヲ匿ノ再擧ノ時ヲ待  
然氏運命極テ生捕ト成ル汝旧好ヲ忘スハ我ヲメ自殺セ

シムへし兵部不聞僕從ニ命ヲ繋リ縛テシメ是ヲ携テ大津  
ノ御館ニ至ル 神君其功勞ヲ賞シ三成ヲ本多上野  
介正純カ家ニ因ニセシム

岩洲夜話

九月廿三日田中吉部多石田三成と生捕大津の津路横へ  
百日し集りりしとき 家康公を江戸と中野の如し

園ヶ原軍敷より以後浮城山の嶮海と渡りて岩洲に出  
るべく道より後中と北へ想更し其月の夜と留破れ  
ある處指と志し海へ渡りて獲り岩洲の舟に伏し  
く居りし所と搦手申上校を其節津赤少向公

此く大急送の舟とく何處へ行きこのうまに金銀と  
ありし後子見らるるきし御子指とくしやを以て其  
の男少と申上りしとき 家康公作らるる一身を  
食くくし其事のお念とくするあるはるるを以て  
其一旦此命も大切の候なり其後とくしを以て其  
衣指とくしと喰めさせ食事とくしを以て病氣あり  
と醫陣と掛く其生後とくしを以て其事とくしを以て  
あるきとくしと後とくしと終るる尚ふ本多上野介陣不  
下其命の如く作後とくしとくしを以て其父の仇と



ト号シ江州甲賀郡八幡山ヲ築立城郭トス信長公生害ノ后  
秀吉公ニ仕ヘケル處ニ関白秀次公三好孫七殿ト申セシ時  
宮部善祥坊ト父子ノ約アリ后豊臣家ヘ取返サル、時秀吉  
公宣ヒケルハ一度汝子トセシ秀次ヲ我養ヒ高位ニノホス  
ハ慌ナルヘシ家臣一人ハ付ヨトノ儀ニテ田中兵將ノ畧ア  
ルヲ以久兵衛信政ヲソ奉ケル御諱ノ字ヲ賜吉政ト名乗ケ  
ル天正十年長久手合戦ノ時秀次ノ先鋒トノ一番ニ三河ノ  
諸將ニ切崩サレ堀久太郎秀政ニ突ハレタル久兵衛秀吉公  
ノ心ニ叶ケルヤ后三万石ノ加増六万石ニ成テ三州岡崎ノ

城主ナリ程十ク四万石ノ加恩ニテ十万石ニ成ル官侍從位  
四品ニ叙ス同國西尾ノ古城ヲ取立ル三州西尾ノ城ハ足利  
武藏守義久承久ノ乱ニ軍功アルニ依テ二位ノ尼ヨリ三州  
ニテ加恩西尾ニ城ヲ築キ二位ノ尼ヨリ賜ル処ノ源氏重代  
ノ白幡ト友切丸ヲ賜リケルヲ一社ノ神ニ本丸ニ祝正八幡  
宮ト号ス御劔ノ宮氏云寛永ノ頃ノ物語ニ今ニ不思議城主  
ノ変鳴動スルヲ有鳥ノ類宮上ヲ飛或ハトニレハ忽死ス今  
取ニ雁切丸ト名ル劔神体ト云田中兵部少輔關ヶ原合戦ノ  
時ハ合渡川先陣ノ岐阜ノ城ヲ攻佐和山ノ城ニテモ功アリ



石田三成ヲモ生捕

神君へ奉ル三成煩ケル故吉政藥

ヲ與ルニ三成笑テトテモ死スヘキ命藥ハ用間鋪トイヘハ  
吉政重テ申ケルハ迎モ死スヘキ命猶藥ヲモ用氣カヲ強メ  
寂期ヲ取乱サ、ル様ニ嗜ムコソ其氣アル人トモ云ナレト  
進メケレハ藥ヲモ用菲ノ粥ヲノソミテ喰ケルト也

武徳大成

安國寺ハ毛利ニ別テ後鞍馬山ニ隠レ居リ其後京都ニ入本  
願寺ノ内ノ端ノ房ニカクル奥平美作守信昌是ヲ聞テ人ヲ  
遣メ是索ム安國寺是ヲ避テ輿ニ乘テ出ツ其寵童以爲天傘  
已ニ窮ル逃ルヘカラス他人ヲノ殺シメニヨリハニカニ我

キニ是ヲ殺サンニハ安國寺カ輿中ヨリ頭ヲ出テ是ヲ  
斬左ノ頬ヲ傷リ安國寺大ニ驚テ頭ヲ輿中ニ入時ニ信昌カ  
家士駈來テ是ヲ捕ヘ大津ノ御館ニ献スノ  
神君村越茂  
助ヲノ是ヲ囚ヘシム且茂助ニ命メ時服ヲ三成行長安國寺

ニ玉ヲ

武功實録

治部女生捕レタル時絆ノ帷子

キヲユルサレタリ藤

堂宮内來テ某ハ治部女恩ヲ受タルモノナレハ一目逢度ト  
達テ望ニル故ニ對面ヲユルス宮内サテミト云治部少宮内  
モイキヤニ最早何莫モイハヌモノト云フ扱三人工時服一

重ツ、臺ニノセ被下候小西ハ一時ノ寒風ヲノカレヨトテ  
小袖被下辱存候諸人ニ對面サテ、面目ナシ身ニ刀ヲタテ  
又宗旨故如此見クルニキ目ニ逢ト云フ安國寺ハ小袖ヲ見  
テソレキシヨト云テ着用ス諸大名逢テモ無言也疵ヲイタ  
ムト見エタリ石田ハ小袖ヲ見テ是ハドコカラト云

上様カラト云 上様トハイヤ 内府様ノ事也ト

云石田扱々上様ハ此中御他界被成タルニハヤ 内府  
ヲ 上様ト云コトヨトハカリニテ小袖ヲ着セス諸大

名ニ逢テ雜言ヲ云フ石田ハ此時四十一歳大谷ハ三十八歳

嶋左近ハ石田カ電人ナリ此左近カ進メニヨリテ石田逆意  
モ起リタリ左近底意ハ石田カ天下ヲトリタラハ畢竟我モ  
ノト存シタル由左近ハ知行ハ三十石ナリノ

天元實記

後堂佐渡守大伴とくは夜造とくは多かしの得とくを大垣の城に指懸  
作垣見惣管とくと候と仕儀おはは席とくをとくお着此毛利  
氏終ハ何致とく一也と終とく身とく高虎形とく冥ヶ原長殿軍  
の奴系討節ハ進とく一西由ハ迎とく下とく上とく中とく九列とく筋とく子とく終とくテ  
冥ヶ原方沙彌利とくととく候とくお加とくテとく日とく中とく愈とくの石田と  
初福原垣見杯仕合と西終取とくりとくひとくくとく呼とく候とくテとく定とくくとく色とくる





此中上の如く 内府公沙氣とて此為愛は終るに終る  
我功に多しとせよ此兒にもせよ人の主たる者の身と我  
家此は成地家此は神也と持河の如くせよ此にて  
うはねにせよと上彼書所の後を我未父子及上唐内諸人  
様へふ入通斗とてなる中り此書所あり今度我亦此  
一我福利と持たることと後とて馬書の組此は神風信の  
奴亦まて控柄とて振振我亦の不中月とて然る事とてはれ  
ゆはれ後うたる後之必竟此ともの中月根のうを成友と  
は思ふに也此作て之解死人の後此は信也も此書所は也

右の序意の如くと馬書形り傳授自教お果場は也

右の後世同流布此四録は西列中根不願とて之とては

此経を此とて此一馬書後も切後此信存の事此書所は也

うとて之とて右の録ハ本信の事及沙也同信也

物終る事とて此書留也

明良決範

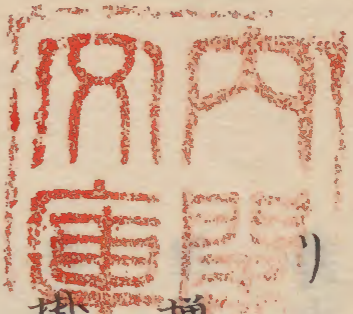
神君三井寺ニ御本陣ヲ定玉直政ハ唐崎ニ陣ス福寫正則膳  
所寄ニ陣ス關ヶ原御利運ノ上猶以世上不靜ニ付所々番所  
ヲ置シ往來ヲ改伊奈圖書堅メケル所正則ノ使者ノ通ルト  
テ番人ト云分メ棒十ト當リケルニヤ使者様テ通

神

君へ御卷ヲ申上其右願切腹ス彼首持セ正則三井寺へ行所  
途中ニ直政出會右ノ次第ヲ聞テ請合正則ヲ度  
君へ御諫申上ル  
神君聞召吾一大変ト被思召合戦六  
度ニ及其戦功無ニ被成共無咎者生害トハ叶間鋪ト被仰所  
ニ直政申上ルハ  
御家運ノ大事ト思召レヨ正則此度  
一番合戦ノ功ニホコリ唯今ニモ此変不叶ハ御恨可申上ト  
見ヘタリ旧友モ見届伏見ニ居ル所正則嫡子モ参ヘケレハ  
大勢一所ニ集ラハ由々シキ御大變相坂山へ人数ヲ押上ケ  
三井寺ノ上ヨリ寺中へ火ヲ掛攻入ルヤハカハ防留ヘキ大

行ハ細瑾ヲ顧ストカヤ是程取シカハタル所ニ又弓箭動レ  
ニハ近頃惜事也ト密問卷削ヲ移兵部計フヘシトノ上意ヲ  
承テ圖書カ旅宿ニ行上意ヲ申渡ス圖書イナキヨク切腹ス  
首膳所寄へ持セ行ク處ニ人数大勢西へ押行ニ付聞セケレ  
ハ正則人数也山科へ陣替ト云兵部アハヤト思急キ行伊奈  
カ首ヲ見セケレハ  
内府ノ御口上宣敷取繕セケルニ  
ソ正則大ニ悦兵部御厚恩不忘ト申シ益ヲ出ス陣替ノヲヲ  
尋レハ御訥訟早速事濟ヘキト不存御不審ヲ蒙ハト遠取へ  
陣替身ヲ退候半ト存申タルト甚不可然物騒無是コソ此節

ノ所要ナレ早々引返サレヨトテ其夜ノサワキハ静リニケ



増譽曰同心以上ノ面々迄閑東ノ猛威ヲ借テ同心カサニ  
掛テ候伯ノ諸士ヲ直下ス檀見カラ為ス也此義頭職常ニ

心ヲ付ヘキテ圖書カ切腹ハ士ノ望所正則カ下午人ニ

伊奈ヲ望ハ規ヲ超テ上ヲ犯スノ罪人也此時未福嶋カ主

將トカシ付サル内ナレハ斯計ヒシ兵部時ノ亘ヲ計知人

也ト云々

古人物誌  
福嶋家人切腹ニ付伊奈圖書御成敗ノ儀ハ圖書ノ罪ニハア

ラスト也起ハ關ヶ原落去ノ時 權現様大津へ被成御

座候 台徳院様ヲ御待被成候時分諸大名ハ未美濃路

ニ居候テ御用候へハ大津へ被参候ニ馬廻三騎ノ外不召連

候様ニト被仰出候草津御番改候伊奈圖書ハ御銃炮大將殊

ニ大組ニテ居申候然處ニ福嶋家人大津へ使ニ参候其后又

御定ノ三騎ニテ通り候ニヨリ右ノ使ト以上四騎故御番所

ニテ相改候三人ニ捧アタリ申候ニ付福嶋被申上番頭圖書

ハ切腹也畢竟圖書ハ不存他ノ組ノ足輕ノ捧アタリ候へ共

圖書大組頭故上意ニモフシヤウナレ共何方ニテ命ヲ上申

候モ同前也短氣成福嶋申上候へハ何共被成へキ様無之候  
間切腹可仕卜ノ支也圖書モ畏奉存切腹仕リ候他ノ右ノ足  
輕ノ頭ヒキヤウ十ニ事ナリ

岩洲夜話

正則事ノ度諸ノ子孫ニシテ家軍忠是所被成中ノ事ナリ  
手切ナリナリたる故一ヤリと諸人ノ死法仕勿備  
家康公モ亦沙外ノ思一正則公候モ亦死之  
冥ク原表沙利運ニ如クいハシ程々ノ誠意被成ニシテ  
四ノ有ク靜徳ナリナリ侍ナリシハ凶徒ノ後平石田小西  
カキモ亦所方此知事ニシテ家康公モ亦死之

正則公候モ亦沙外ノ思一正則公候モ亦死之  
冥ク原表沙利運ニ如クいハシ程々ノ誠意被成ニシテ  
四ノ有ク靜徳ナリナリ侍ナリシハ凶徒ノ後平石田小西  
カキモ亦所方此知事ニシテ家康公モ亦死之  
大志ノ事加恩モされし御モ無使也西則ノ宛行せ給ハ  
其身モ亦仕公ニ死ナリナリト或人ハ候モ并侍也如備ハ  
死リ給ハ忠政モ言テ曰福徳事ト云々此為メ大志被成セ  
人ノ中ノモ過書事ハ 家康公ハ家ノ人の候方れハ  
少少ノ事作身ニシテハ石川候之去ナリナリ我モ人ト一生  
事ナシ誤ラる事ニヤリナリト申シタカシメ物ナリト云々  
大志ト清願ハ作身沙利運ニシテ家康公モ亦死之  
大志ノ事加恩モされし御モ無使也西則ノ宛行せ給ハ

秀忠公流傳ノ事



西別所定目と昔記の年月とと出候と申す上候もあらず  
法事と申す一書改令と云々此等と云々

天元實記

廿一日毛利輝元大坂西丸と申す木津の下屋敷一軍指  
付けし月池田輝政福清西別所中幸長思田長政と馬堂成  
友堂高虎林立會大坂の城代徳丸と云々

廿六日秀頼極極大坂今より大坂修理船と申候為使  
今度の送儀秀頼初年より依りて今くも意趣と  
し存候石田三成も急送下事記りの旨申す事  
廿日増田高房の射長望屋一合と申助けはぬ旨申す此

城代候と池田輝政一書後一書野子登山下はるは  
作出候と云々

駿河土産

関ヶ原の初九月廿一日大坂表一 秀忠公御城の別大坂

此面、十六日正午連日と云大坂一市若陣は如くやいなや  
城中一市使と云々今度伏見の城もく討死と云々  
秀忠公の射元忠松平之庵隊忠同心高田三人の若大の首級  
当地一水鳥実槍は致しと云々一札の儀秀頼公と  
し子孫と云々一書出政殺下はれとの由は上より城中大子  
等と云秀頼公如成流度由信長平上より秀頼末子初年此

事よりゆりて一札の企の候と云及中ノ首実捨の候も毛利  
輝元其外も何れかの仕業と云々秀頼此に居たる候も  
其々各吹くは従之の候  
秀忠様ノ京都ノ御成候  
ヨ  
権現様御守御候は秀頼の候ハ津敵先河内  
向後の候ハ津敵米七十万石に御成り候と云々  
夫との候と法皇の旗とも法立一戦の支度と云々  
よ右の色秀頼安堵の候成候御成候以後法皇より持旗  
と云々候は休息はせしめ

武徳大成  
今日

神君増田長盛カ死罪一等ヲ減シ高野山ニ蟄居

セシメ其子兵太夫守次ヲメ武州岩築ニ禁錮シ高力摂津守  
忠席ヲメ是ヲ護セシム徳善院玄以ハ其罪長盛ト同シト云  
氏然氏密更ヲ  
神君ニ告且三成等カ逆謀ノ狀連署ニ  
及ハス故ニ  
神君其罪ヲ宥テ是ヲ責玉ハス後ニハハ  
玄以ヲ召然トモ病ト称メ不出  
神君大坂ニ入ントメ大津ヲ祭メ伏見ニ至玉ヲ  
台徳  
公先立テ御到着  
神君ニ謁シ玉ヲ  
神君曰我ニ  
先立テ大坂ニ至ルヘシ明日  
神君御駕ヲ出メ藤森ヲ  
過ク時ニ酒井河内守重忠及弟与七郎忠利途中拜謁

神君是ヲ召曰我松平甲斐守忠良大須賀出羽守忠政ヲノ假  
リニ大津城ヲ守ラシム然氏彼等歳十ヲ弱ニ汝兄弟是ヨリ  
往テ彼等ニ代テ城ヲ守ルヘシト云々此夜定ニ止宿シ玉フ  
續閑談 江別松北流の今昔は極口信忠の盛徳 初孫次郎 兼盛 信々未定頼子  
流ハ定頼細川晴元と頼ひく持別へ出陣の時彼國不為  
終子天門今多入り入江左を控置し極口同家乃筋目と  
以くあ家相並武威と奮ふ極口帯仕山の城と守り喚ぶ  
及川の城もく率去るそ子太と云後石見守初秀と頼氏  
及川没爲の別家来田村と七を主人とりし者も之永保

十二年正月是利公方義昭京都本願寺より高尾の處之  
好之人流多し政望を競攻別地系一軍切伐を以て  
信長公は成はるが秀吉公へ附く事江流海軍退治の形柄  
毎度手切音伐励一を習の列しりし事極口老之兼  
継荒木播磨守村重叛乱の節信長公は味方より出陣し  
太田川より流く戦死に石見守も意の欲と義者一人  
と討たる馬より走る事来田村と助と守りし事極口老之兼  
徳川池田忠常信輝公并と賜りし事今も信々石見守  
初秀と其子信忠を頼の若人より秀吉公の罷とて

従古位下ノ叙一山城の凡百廿石と御成上ノ正十八石  
小田原陣の付多ノ被の筒此石物と持テ事仕仕  
於津陣場 権規様沙並と洋載と名付此陣  
中ノ秀吉公ノ出陣仕申成の陣に搭陣玉天川村を  
七百石此加増とあり於合多石と願テ印子忠代左衛  
右衛門尉申られテ後山崎八幡進軍の時行たり且  
播磨道割の監吏と勤じ慶長六年九月 権規様  
冥ク系津御利とく大坂ノ事ノ時石見守重直病たりと  
ソノ山科と出向御備一津意の上云々々々 慶長四年四月

終子山崎を所ノ所分別所村とく率守テ其時分世將馬七  
知重知少左衛門吉公より賜られ加忠の地系津代官所是  
上選物とく一極口肩衝と献一布知別所村中安徳の  
形ハヤラシク 権規様沙並便とかけら進斤相  
市正具元大久保十左衛門長安とく一形一色は分月別所村  
安徳の津系平進とテ下多一人ノ是書基七成長の後  
江府より於白書院 台徳公ノ津備一書此條  
八幡宮の葛蒲皮成物一津朱印と洋載と寛永之  
津上洛の御台敷と想入時ノ父ノ徳似と云々上意



ル是ノミ古ニ替タル故ニ此  
君万世ト謠フト也曾我  
助真室町柳管ノ浪人ノ所關東へ召抱ラル、故關東ノ歴々  
京家ノ士ト思慢リケル或時土井利勝座與ニ昔ノ曾我兄弟  
ノ次第家ニ傳ヘラル、事モ候哉世上申ナラワシタル事モ  
候ト尋レケレハ助真サレハ候若輩者氏ノ儀何ヲ致タルニ  
ヤ無覺束存ルヨシヲ挨拶シケルニソ一座ノ人々曾我庸人  
ニ非スト大ニ称美申レシト也

武徳大成

廿八日大坂ノ西城ニ移ラル勅使來リ賀シ搦家門跡公御雲  
客僧徒社人五畿内ノ商人群リ來テ拜謁ス阿部伊豫守西尾

隱岐守山口勘兵衛城織部正永井右近大夫是ヲ披露ス

神君并伊直政榊原康政本多忠勝ヲメ諸將ノ忠不忠ヲ正サ  
シメテ天下ノ政事ヲ議シ玉フ本多上野介ヲメ諫訟ノ事ヲ  
掌ラシム并伊榊原本多共ニ諫テ曰逆徒秀頼ヲ扶テ乱ヲ起  
ス大坂ハ要害ノ地也秀頼ヲメ永ク此ニ居シメハ恐クハ後  
ノ患ヲ生セン 神君曰秀頼幼稚ニメ我臣ノ謀ヲシラ  
ス今何ソ是ヲ棄ルニ忍ヒンヤ其後 神君秀頼ニ對面

シ斤桐市正旦元ヲメ輔佐タラシム是ニ依テ上下心ヲ安ス

續閑談

美ヶ原お湯々後大徳寺塔中ニ在在友田能登入道方へ

秋元誠牛馬可致若九師を以て津加行可  
以下並昌七令勤仕の上意をとりとも後田と京橋若比敏  
免蒙りし中ひりて某も毎可致ゆ系是後小は在ひ今  
度の企進はつたに而も京橋若比敏は是れは根多く京橋は毎  
るは某も練も用ひし中ひは是れは根多く京橋は毎  
ゆ系の中津加行と中上とくは是れ公小出ひに京橋は  
の中心者よは是れとく津加行とあるは是れ後京橋津系  
津加行の後後田言ふ多正信と以ては是れ京橋はゆ系  
は後田のうも中津加行は是れ後田言ふ多正信と以ては是れ京橋はゆ系

汝成相直辱き一辱しなり一以後時節と以て京橋は加慈  
能行はりし時汝もゆ系は是れ一とく聖州は是れ一とく  
去方の子名後田能別津加行一某は是れ一とく勤仕は是れ一の付  
能登るの妻方へ化難田二名は是れ一とく

武徳大成

嵩津兵庫頭義弘大隅ニ皈ル其父龍伯彼カ三成ニ黨スル丁  
ヲ怒テ相見ヘス義弘陳メ云我伏見ニ入テ忠ヲ  
公ニ竭ントス然モ鳥居元忠城中ニ入ス故ニ止事ヲ得スノ  
三成ニ黨ス竜伯是ヲ聞テ其怒ヤ、開ク此項山口直友モ義  
弘カ家士太田助亟新納旅菴ヲ捕ヘテ糾問ス二人陳謝メ元

忠カ伏見城ニ入レサルヲ告ク是ニ依テ直友等ニ并伊直  
政本多正信ト議シ助亟ヲ薩摩ニ遣シ山口カ家士和久氏ヲ  
添テ竜伯ニ告テ曰速ニ洛ニ入テ罪ヲ謝セハ  
怒解ヘシ竜伯許容ス然モ未夕杲サス宇喜田秀家流落艱難  
ヲ嘗テ薩摩ニ至義弘ニ倚頼ス

毛利輝元木津ヨリ安藝国飯ル

神君怒解玉ハス

台徳公ヲメ是ヲ征伐セシメント欲ス輝元恐テ并伊直政ニ  
憑ニテ和ヲ請テ云  
内府公我家ヲ亡サスハ周防長  
門兩國ヲ領メ足レリ其余ノ八州ハ悉ク是ヲ獻スヘシ直政

懇ニ請フ

神君是ヲ許ス

神君誓詞ヲ輝元及長

門守秀就ニ賜フテ父子ノ命ヲ許シ周防長門兩國ヲ授ケ安  
藝備中備後因幡伯耆出雲隠岐石見ノ八及ヲ除ク并伊直政  
モ又誓詞ヲ添テ其證トス是ニ依テ  
台徳公征伐ノ丁

ヲ止ム

天元實記

十月朔日今夜送流方浪中石田山爲安國寺三人の事治  
中此大流と川後一六條河原より首茂は創平忠信等  
の従士是流致す因氏

感狀記

石田三成ハアル寺ノ童子也秀吉一日放鷹ニ出テ喉乾ク其



寺ニ至リテ誰カアル茶ヲ點シテ來レト所望アリ石田大十  
ル茶碗ニ七八分ニヌルクタテ、持ニイル秀吉飲之古ヲ鳴  
シ氣味ヨシ今一服トアレハ又夕テ、捧之前ヨリハ又熱ク  
シテ茶碗半ニタラス秀吉飲之又試ニ今一服トアル時石田  
此度ハ小茶碗ニ少シ計リナルホト熱ク夕テ、出ル秀吉飲  
之其氣ノハ夕テキヲ感シ住持ニコヒ近習ニ使之ニオアリ  
次第ニ取立テ奉行職ヲ授ラレヌト云ヘリ

續閑談

大徳寺此ニ玄院ノ石田治部少輔ニ成リ牌何足号江東院  
正岫周官と歎死の後新ニ葬ト云ク誰人ノ彼類ト云ク

収め葬りり市ノ下也

先人雜話

石田乃子云人の主君を取物と云くハ何れせく此其ノ人

ゆはる盗人なり其ハ色ニ々々借機也其ハ亦愚人之と

續閑談

常盤とりの舞妓何れ人此指ノ意ニ々々性も荒成

終て是石田ニ成リ為亂あり

家忠日記

十七日 大神君出羽待從義光ニ御書ヲ賜ル

名度中其ハ去廿七日大坂小相好安海下中其ハ二島内  
物々其ハ長久保等其ハ二島并其ハ赤細河長其ハ可  
中其ハ長久保



勢別多羽の城は楯尾の九鬼大隅守純別の城内妻房も  
なりと旗本と系連流方志く後軍のよしとすて城は  
得退散はひし月九鬼長門守<sup>大隅守</sup>多羽の城は〜〜後  
大坂へ参り池田輝政へ使へ父大隅守城は助平は下  
度旨願ひ得大隅免す〜〜福崎西別と加〜  
頻頻中身事思免は遊そ上二万石は事加増と下事  
示以舟とと〜〜高隆候へ限り〜〜事大隅守候  
家老事田中常<sup>長門守</sup>と事若の旨は波勢兵は居り候と  
豊田相係〜〜親害は事首代大坂へより候傳の者

大隅守事敏免は遊〜〜事大隅守持事代傳志と勢別  
星傳の事屋〜〜事遊〜〜事長門守大隅守を  
豊田候事遊折最中付候〜

至極宰相高次大隅の城と波和流〜〜は得退散如雲と系  
事合戦は勝利の候お事今日一日は城と事お事お事  
猶史の事大隅忠節知事跡事此あり〜〜事一統〜  
波後悔〜〜も既し出候の上は候事事不及是事  
紀別事事〜〜事山は波候事事 内府公事大隅守  
事大隅守内事事事事〜〜事事事〜〜事事事



海内世傳其多し中一書通して本履して河をさし以て坊  
明も中一破して河をさし其見中一城大津の城より次よそ  
去りしは坊に一日を以て其城とはは海内を治る事  
よせし中一は一人の流も其程を元の事通しよそと  
其あつて推取あつて其後井作事改して其あつて  
其を必校同道系りしは其あつて其作事改して其あつて  
連大坂へ系りしは其あつて其作事改して其あつて  
其傾る事し中一演れ城へ其あつて其あつて

古人物語  
京極宰相殿實地吉原殿大津籠城ノ時兼々鉄炮ノ藥ヲ菱切

ノ壺一ツ隠し置玉藥キレ候時ニ出ヌニ依テ三日持コタヘ  
ケレ氏玉藥キレテ一放モ十キニ付扱ニ成

武功實録  
京極宰相大津籠城ノ時武者奉行ハ赤尾伊豆門役ハ油井久

治後伊豆ト云フ敵三人タテコメ候赤尾伊豆ハ淺井家人赤尾美作子

也美作ハ淺井家ノ武者柱也伊豆敵ヲタテコメ候ハ氏味方

ヲ攻々タテ出シタルトテ其項ソレリタル者モアリ然レ六

條ニテ明智門役ヲ仕リタル外ニハ赤尾門役ノ仕様ニシク

ハナシ佐川田喜六郎此節立花家ニ有テ攻午也働ヨシ

廿四日家忠日記寂上出羽守義光東國ニ於テ景勝カ兵戦ヒ勝利ヲ得

ルノ由大坂ニ至テ註進ス其書ニ云ク

一 九月十六日同廿四日同廿九日於長谷堂之度ニ令執子  
上泉之乃正岩井傳平等松下幸之助三人之初百余人  
討捕之事

一 十月朔日長谷堂より攻陣ノ討長井境ニ押搦シ余人  
討捕之事

一 白石堂川江左兵長崎富並所ニ於テ子百余人  
討捕之事

一 庄内大浦ニ於テ攻陣ノ初下父子成之百余人討捕之事

一 仙水柳田ニ於テ攻陣ノ城ニ父子成初男女子百余人  
討捕之事

一 浪西宗九月十八日為加勢ヲ終地百或塔擬是討捕之事

一 同廿二日馬上百或塔擬是討捕之事

武德大成  
二十七日 神君御不例群臣大坂城ニ登御氣色ヲ窺フ

二十八日五郎太丸大坂ニ誕生母ハ清水氏幼名龜五郎太丸

初ノ諱ハ義利後ニ義直ト改メ右兵衛督ト称ス其後尾張國

ヲ賜テ從二位ニ叙シ大納言ニ任ス二十九日 神君御

氣色快然諸士登城是ヲ賀奉ル

慶長年中伏見よりて誠齋若門秀房藤江津金殿へ申上り  
云加納き女と云く加納きと申す世は見物なる所此  
粒珠と稱すようけ者多れと申候なる事此の粒珠は  
昔々として津島是れ上より津島は如く珊瑚珠の粒珠と  
此下候お國の津と申候は成り候津と申す事  
天下よ幾多方の女河津とも一人の女と天下よ此津  
と付女之我ハ天下一人の男と申事不付河津女小  
おとつたるハ津島なりと申候事今此粒珠は  
付お申す印の粒珠一握の良人の心さうんお付河津

伊田舎者との系相云ともそし中り候

家忠日記

十一月十六日

台徳院殿参

内ノ為大坂ヲ出御伏見ニ入り給フ此日興福寺願々印ヲ給

フ

興福寺願々印を内々存候事此の印は流傳中の中  
此の印は先親の印流傳中の中此の印は流傳中の中  
此の印は先親の印流傳中の中此の印は流傳中の中

二日信付り也

慶長六年

十一月十六日

家康

一字院殿

十八日

台徳院殿参

内此日青山忠成従五位下ニ叙シ播磨守ニ任ス

黒田如水大坂ニ参候ノ城ニ登テ 大神君ニ謁ス于時

九州ノ軍事ヲ問セ給フ如水委細ニ是ヲ達ス

戸田土佐守尊次ニ命メ越前國丸岡ノ城ヲ守ラシメ給フ尊

次此城ニ在ル事今年ノ冬ヨリ翌年春三月ニ至ル

松平左馬允忠頼ニ命メ金山ノ城ヲ守ラシメ給フ

是ヨリ先キ忠頼参州岡崎ノ城ヲ守リ在而金山城守

金山ノ城領一万五千石ヲ忠頼ニ賜ル本領武州松山ノ城一

万石元ノ如シ

内藤三左衛門尉信成ニ命メ濃州岩村ノ城ヲ守ラシメ給フ

信成此城ニ在ル事今年ノ冬ヨリ明年ノ春ニ至ル

此冬釣命ニ依テ大久保忠常従五位下ニ叙シ加賀守ニ任ス

土屋平三郎忠直従五位ニ叙シ民部少輔ニ任ス

天元實記

西丸ノ城守有角本多忠勝等并侍並改柳原康政等入

一守中津山ノ城守上田此志田安房并左衛門父子ノ成大罷此

守ノ守は其ノ以得テ何率津助命此城ヲ及方由所ト



中流より結号の紙より伊豆守頼の紙より物も紙も伊豆守と  
同様の紙も在りは故を悉くおぼえ同 伊豆殿様へ  
二條様より書紙は作上紙をありは故を悉くおぼえ故人  
兼りて元は中を通り波木父子の紙も大衆の者も事ふ  
し得て親子の紙もはるる豆別の子も波木に在り頼の者  
随分と 伊豆殿様へ中上見下りしと在りて紙と  
内府定中上見下り 秀忠命定中上見下りしと在りて紙に  
乃公より書紙は中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
より紙と 内府定中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙

秀忠公は此書紙より進出知の外書紙様は伊豆守  
紙と父子の紙も是の御命頼の中上見下りしと在りて紙の紙と  
紙 内府定中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
安房守より紙と在りて紙も中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
御命様は公書紙より或は紙も是の上田様へ御命様と  
向の上りも進出紙も是の紙と在りて紙も中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
り安房守より紙と在りて紙も中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
り紙の紙も是の紙と在りて紙も中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙  
る作より大我書紙頼の中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙も中上見下りしと在りて紙

よて之を重て中守に任ぜしむと云はれり月々之を  
忠勝へ申出さるる其後修善寺に老牛に列座の翁一匹出  
け向て老父安房守成子月何角に若子おは下作成  
忠勝へ之を細申す所おはせ給ふ  
秀忠公御意

之成り先を極意角に申上り給ふ事有らば私に之は府と  
有る或は之を捕成すも成らぬ通上田表も之も毎日の御子  
是見申誠の如く同公お仕り給ふお友是水之方お申御命  
に成りお持子能く之は申上り申すに申す申す申す  
我申沙然の御事と云はれ申す申す申す申す申す申す申す

此後申の御事と云はれ申す申す申す申す申す申す申す  
將に御子の如くお持子の如くお持子の如くお持子の如く  
障り申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
と云はれ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
此後申の御事と云はれ申す申す申す申す申す申す申す申す  
御從取申の御事と云はれ申す申す申す申す申す申す申す申す  
是より申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
との様様申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す



時内室も儲とありし  
孝和院と云ふ年慶長十五年  
六十七歳と云ふ師山とありし  
卒去人二男幸村八同十  
九年大坂子孫城氏



武徳成業卷之四十四終

